

ビデオアートプログラム

A Window to the World: 世界に開かれた映像という窓

第 29 回：ハーリド・ハーフィズ 第 30 回：周滔 (ジョウ・タオ)

新しい映像表現に触れることができる無料プログラム

「A Window to the World：世界に開かれた映像という窓」は、館内の無料スペースで、世界で活躍するアーティストたちによる映像作品を紹介するプログラムです。映像が映し出されるスクリーンを、距離的な隔たりを超えて世界で繰り広げられる試みと私たちとの回路を開く「窓」にたとえ、年間を通して先鋭的な表現を紹介しています。

第 29 回：ハーリド・ハーフィズ

●上映期間／2012年9月19日(水)～11月18日(日)

●上映作品／2011年2月11日：ビデオ・ダイアリーズ 2011年 カラー、シングルチャンネル(オリジナルは3チャンネル映像)、サウンド、6分19秒

2011年2月11日、ムバラク前大統領失脚というエジプトからの突然のニュースに、世界は驚かされました。しかしそれ以前から、動画共有サイトなど、ネット上ではこの革命をつぶさに伝えていました。そこには、恐怖に立ち向かいながらも声を上げる多くの市民、さらには犠牲者の姿も捉えられていました。本作はそうした様々な映像ソースを組み合わせ、報道では描かれない「日記」のような個人の心象として、革命を再構成しています。

ハーリド・ハーフィズ

1963年エジプト、カイロ生まれ、同地在住。絵画やビデオ作品を制作し、エジプトの民衆文化と、欧米社会からの自分たちのイメージを描くことで、政治的なメッセージを発する。2010年マニフェスタ8など多く国際展に出品。2011年バマコ・ブラシエル基金賞受賞。

第 30 回：周滔 (ジョウ・タオ)

●上映期間／2012年11月20日(火)～2013年1月14日(月・祝)

●上映作品／①ニューヨーク時間 2009年 シングルチャンネルHDビデオ、サウンド、16分55秒 ②サウス・ストーン(南石) 2010-2011年 シングルチャンネルHDビデオ、サウンド、24分51秒

《ニューヨーク時間》は、ジョウ・タオが部屋の中で腰に玉巻き状のロープをぶら下げ、自分の動きをトレースするように部屋中にロープを張っていくという、ささやかなパフォーマンスを行いながら、日常生活を送る自分の姿をカメラで記録した映像です。視覚化される、作品素材としての身体の動きが、時間の経過とともに緻密なドローイングのように立ち現れてきます。もう一方の作品の舞台は、広州の一角に未開発のまま残る地区「サウス・ストーン(南石)」。映し出されるその地区の風景に、真剣な表情の作家本人と友人が登場し、静かに流れる時間と呼応するように粛々と脈絡のないパフォーマンスを行います。パフォーマンスはジョウにとって、慣れない場所と自分との関係を築く手段であるということ、ユーモラスに表現します。

周滔 (ジョウ・タオ)

1976年中国、長沙生まれ、広州在住。広州美術学院で絵画、同大学院でミクストメディアを専攻。ドキュメンタリー的な手法で日常を捉えながら、自身のパフォーマンスを繰り広げ、映像を制作する。2012年、時代美術館(広州)、2011年、クイーンズ・ネイルズ・プロジェクト(サンフランシスコ)などにて個展を開催。また、2011年、第6回クリチバ・ビエンナーレ、2010年、ロケーション・ワン(ニューヨーク)など。



ハーリド・ハーフィズ
《2011年2月11日：ビデオ・ダイアリーズ》
2011年



周滔 (ジョウ・タオ)
《ニューヨーク時間》
2009年

上映作品：解説テキスト

ハーリド・ハーフィズ／ネット時代の革命と個

本作タイトルの「ダイアリーズ」が示す複数の日記のように、個々人の回想には、歴史の熱狂の影に発生している様々な事件や、その影響下にある当事者たちが描き出される。本作の3つの画面には、動画共有サイトにあった個人投稿映像の抜粋もあり、それぞれの事件の情報は世界の個々人で共有されていた。そして、そこには死も捉えられる。確かに本作家も、エジプトでのムバラク体制崩壊前に、ソーシャルメディアを使って、革命の熱狂を世界に発信していた。「エジプト人アーティストの Khaled Hafez からアーティストの Ahmad Bassyouni がカイロで狙撃され殺された」とのメッセージが来たという国内で和訳されたツイートもあった。アハマド・バシオーニ (Ahmed Basyony) と一般に表記されるメディアアーティストは、彼の友人であり、本作ではモノクロに加工され、遺影のように映される人物のひとりである。革命の中で語られる死は、英雄譚のように大きな歴史の主人公を作り上げるが、本作のように個人的な思い出を巡る哀悼は、むしろ故人の存在に光をあてる契機になる。もはや応答しない死者に対して、残された者はその名を呼びかけて自身の物語をつむぐ。追憶を誘うような BGM のギター曲は感傷的で、作品導入の緊迫する警察隊の様子からデモのシーンに移る所で、「必要な変化」という歌詞による訴えをのせて流れ始め、革命への内省的な態度を表現する。このように当事者の感傷的な態度をエジプトの外へ発信することで、世界の歴史の中で見落とされがちな個人の問題を受け取ってもらおうとする。確かに日本国内でもアラブの春に関する報道は 2011 年 2 月 11 日の前大統領辞任までわずかだった。そのため、突然の無血革命かのように、市民の痛みが伝わらない世界のトピックにしか映らなかった。これに対し、本作家はニュース映像と共に個人によるイメージを差し挟み、最後にはテロップで故人に対する「思い出に」と、その名を刻んで、革命を個人的なものに引き戻している。(西山恒彦)

ジョウ・タオ／日常という舞台でのパフォーマンス

レジデンスの機会を得たニューヨークで制作された《ニューヨーク時間》は、部屋の中で日常生活を送る自分の姿をカメラで記録した映像である。普通の生活と一つだけ大きく異なる点は、作家が腰に玉巻き状のロープをぶら下げ、自分の動きをトレースするように部屋中にロープを張っていくという、ささやかなパフォーマンスを行っていることである。動けば動くほど、本来見えないはずの動線が部屋を占拠していき、日常生活のすみやかな動きを妨げる。張り巡らされたロープをまたいだりくぐったりと、蜘蛛の巣に引っかかってもがく昆虫のように滑稽なしぐさで部屋を移動する作家が、次第にその状況に観念しロープを物干しやテーブルの代わりに活用する様子は笑いを誘う。作品の素材としての身体の動きは、軌跡となって視覚化され、時間が経つにつれ空間を埋めていく緻密なドローイングのように立ち現れる。

時間と空間に関わるもう一方の作品の舞台は、急速な都市の再開発によってその姿を変えつつある広州の一角に、未開発のまま残る「サウス・ストーン (南石)」と呼ばれる地区である。約 1 年におよぶそこでの生活で作家が見つけた動物、さびれた路地、古びた住居やその軒先に実る植物など、ノスタルジックな風景がドキュメンタリー的な手法で映しだされる。そこに登場する作家本人と友人は真剣な表情で力をあわせて、喜劇のようなパフォーマンスを繰り広げる。脈絡のないこれらの動作は、サウス・ストーンに流れる静かな時間と呼応するように粛々と行われる。信頼できる友人に身体を預けるような動作から生まれるパフォーマンスは、日常生活を送る住人たちと直接交わることはなくとも、ジョウにとって慣れない場所と自分との関係を築く手段である。徐々に住人との距離を縮めていきながらも、終始客観的な視点を保ち、同じ時間と空間を共有することで、現実とも非現実ともつかない一つの舞台を作りあげるのである。(角 奈緒子)

過去の「A Window to the World」

第28回：スッティラット・スバハリンヤ



2012年7月18日(水)
～9月17日(月)
シューティング・スターズ
(2010年)

第27回：シャハール・マークス



2012年5月15日(火)
～7月16日(月)
1,2,3, Herring (2011年)

第26回：スミルハン・ラディック



2012年2月7日(火)
～4月22日(日)
オレンジ・ノイズ (2009年)

第25回：ラリッサ・サンスール



2011年11月29日(火)
～2012年2月5日(日)
スペース・エクソダス (出宇宙記)
(2009年)

■第24回：山本篤

2011年9月21日(水)～11月27日(日)
2 dogs (2010年)

■第23回：田村友一郎

2011年7月12日(火)～9月19日(月)
NIGHTLESS (2011年)

■第22回：シンシア・マルセリ

2011年4月26日(火)～7月10日(日)
クルザーダ (2010年)

■第21回：佐藤義尚

2011年3月8日(土)～4月24日(日)
papers digital version (1991/2003年)、desktop (2005年)、
patterns (2009年)

■第20回：スキ・チャン

2011年1月18日(土)～3月6日(日)
スリープ・ウォーク・スリープ・トーク (2009年)

■第19回：マイケル・ベル＝スミス

2010年11月23日(火)～2011年1月16日(日)
セルフ・ポートレート・ニューヨークシティー (2006年)、オン・ザ・グリッド
(2007年)、ビルディング・アクロス・フロム・グリッド ダー・ベン
ド (2008年)

■第18回：チョイ・カ・ファイ

2010年10月5日(火)～11月21日(日)
矩形の夢、シングルチャンネル・バージョン (2010年)

■第17回：ジアッド・アンタール

2010年8月24日(火)～10月3日(日)
トルコ行進曲 (2006年)、WA (2004年)、タンブーロ (2004年)

■第16回：崔廣宇 (ツイ・クアンユー)

2010年7月6日(火)～8月22日(日)
ショートカット・トゥ・ザ・システムティック・ライフ：シティー・スピ
リッツ (2005年)、不可視の都市：タイパリ・ヨーク (2008年)

■第15回：辻直之

2010年5月25日(火)～6月20日(日)
3つの雲 (2005年)

■第14回：トロピョロン・ロッドランド

2010年3月13日(土)～5月9日(日)
132BPM (2005年)

■第13回：ニーナ・フィッシャー、マロアン・エル・サニ

2010年1月16日(土)～2月28日(日)
暗黒郷を綴る (2008/09年)

■第12回：ヤエル・バルタナ

2009年11月17日(火)～2010年1月15日(金)
震える時 (2001年)、宣言 (2006年)

■第11回：オルガ・チェルヌイシヨフ

2009年9月15日(火)～11月15日(日)
列車 (2003年)、楽しい夢 (2005年)

■第10回：トロマラマ

2009年7月18日(土)～9月13日(日)
セリガラ・ミリシャ (2006年)

■第9回：ジョルディ・コロメール

2009年5月23日(土)～7月17日(金)
アーキテクトン (バルセロナ、プカレスト、ブラジリア、大阪) (2002-04年)

■第8回：ホ・ツ・ニエン

2009年3月14日(土)～5月10日(日)
ボヘミアン・ラブソディ・プロジェクト (2006年)

■第7回：ブルースープ・グループ

2009年3月3日(火)～4月19日(日)
出口 (2005年)

■第6回：ミッチェル・ローズ + BodyVox

2009年1月27日(火)～3月1日(日)
現代の白昼夢：ディア・ジョン (2001年)、現代の白昼夢：中空の鳥々、
(2001年)

■第5回：榊原澄人

2008年12月16日(火)～2009年1月25日(日)
浮楼 (2005年)

■第4回：シガリット・ランダウ

2008年11月1日(土)～12月14日(日)
Phoenician Sand Dance (2004年)

■第3回：田口行弘

2008年9月17日(水)～10月31日(金)
Moment-performative Installation- / Moment-performative
installation- (2007年)、Moment-performatives spazieren- /
Momena-performarive wandering- (2008年)、Ordnung / Order
(2008年)

■第2回：ロイック・ストラニー

2008年8月5日(火)～9月15日(月・祝)
現土地調査 (2005年)、神様の味 (2008年)

■第1回：シンイル・キム

2008年6月28日(土)～8月3日(日)
ドア (2003年)、球体 (2003年)、アクション (2004年)

